

第4回

札幌市高齢者健康寿命延伸検討委員会

会 議 録

日 時：2025年6月13日（金）午後4時00分開会
場 所：TKPガーデンシティ札幌駅前 2階2D

1. 開会

○事務局（足立高齢保健福祉部長） 開始時間となりましたので、札幌市高齢者健康寿命延伸検討委員会を開会いたします。

私は、委員長選任までの間、進行を務めます札幌市保健福祉局高齢保健福祉部長の足立です。どうぞよろしくお願いいたします。

2. 保健福祉局長挨拶

○事務局（足立高齢保健福祉部長） それでは、開会に当たりまして、保健福祉局長の影山からご挨拶を申し上げます。

○影山保健福祉局長 皆様、お疲れさまです。

保健福祉局長の影山でございます。

本日の委員会は、おとしの8月以来の本当に久方ぶりの開催となりましたが、委員の皆様におかれましては、大変お忙しい中、引き続き委員をお引き受けくださいます、誠にありがとうございます。

さて、札幌市では、皆様にご議論をいただき、策定いたしました「第2次札幌市まちづくり戦略ビジョン」において、「ウェルネス（健康）」というものをまちづくりの重要概念の一つとして掲げております。このウェルネスにつきましては、誰もが幸せを感じながら生活し、生涯現役として活躍できること、身体的・精神的・社会的に健康であること、と位置づけているところでございます。

私は、この3月まで、ウェルネス施策を所管しておりますウェルネス推進担当局長という立場で、民間企業の皆様や団体の皆様と連携をしながら市民の皆様のウェルネス向上に向けて様々な取組を進めてきたところでございます。これらの取組を通じて、私は、人生100年時代を迎える中、誰もが高齢期を見据え、生きがいと希望を持って自分らしく生きることができる、そのような環境を整備していかなければならないと強く感じたところでございます。この間、皆様と議論をし、検討してまいりました健康アプリもこの一助になるものと考えており、今まさに来年4月の本格運用に向けて準備を進めているところでございます。より多くの市民の皆さんにご利用をいただき、楽しみながら皆さんそれぞれの健康、ウェルネスの向上につなげていただければという思いでございます。

本日は、限られた時間ではございますが、今申し上げましたような視点も踏まえつつ、皆様からそれぞれの専門の立場で忌憚のないご意見を賜りたく存じます。そのことをお願い申し上げます、簡単ではございますが、ご挨拶とさせていただきます。

それでは、本日、どうぞよろしくお願い申し上げます。

3. 委員委嘱・紹介

○事務局（足立高齢保健福祉部長） 続きまして、委員の委嘱につきましては、お手元に用意いたしました委嘱状の机上配付にて代えさせていただきますので、ご了承願います。

また、委員の紹介は、一昨年と同じメンバーですので、省略させていただきます。

それでは、配付資料を確認させていただきます。

机上に配付しております資料は、上から順に、式次第、座席表、資料1の委員名簿、資料2の委員会の設置要綱、資料3の健康アプリに係るこれまでの経過、最後に、クリップ留めしております資料4の第3回委員会までの議論のまとめになっております。

過不足等がありましたらお知らせいただければと思いますが、よろしいでしょうか。

4. 委員長及び副委員長の選出

○事務局（足立高齢保健福祉部長） 続きまして、委員会の委員長と副委員長の選任でございますが、要綱上、委員の互選とされております。

こちらは一昨年と同じメンバーで継続開催となりますことから、皆様のご異存がなければ、一昨年に引き続きまして、委員長には梶井委員、副委員長には平本委員を選任したいと思いますが、いかがでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○事務局（足立高齢保健福祉部長） それでは、梶井委員に委員長を、平本委員に副委員長をお引き受けいただきたいと思います。

梶井委員長は、委員長の席にお移りいただきますようお願いいたします。

〔委員長は所定の席に着く〕

○事務局（足立高齢保健福祉部長） ここからの議事進行は梶井委員長にお願いしたいと存じます。

梶井委員長、よろしくお願いいたします。

5. 議事

○梶井委員長 改めまして、一昨年からの継続ということで、委員長を務めさせていただきますと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、早速、議事に入っていきます。

お手元の議案に沿ってまいります。最初に、これまでの議論の経過と今後のスケジュールについて、事務局からご説明をお願いしたいと思います。

○事務局（横谷調整担当課長） 事務局を担います調整担当課長の横谷でございます。よろしくお願いいたします。

お手元の資料3をご覧ください。

2年前の委員会から現在に至るまでの経緯と今後のスケジュールについてご説明を申し上げます。

札幌市では、令和5年5月から8月にかけて皆様に延べ3回にわたりご議論をいただいた内容を踏まえ、デジタル技術を活用した楽しみながら活動できる仕組みを整えた上で、市民の健康寿命を延ばしていくことといたしました。そこで議論された内容は後ほど改めておさらいをさせていただきますが、具体的には、健康増進につながる健康づくりや人とのつながり、健康管理などの活動をポイントとして可視化し、付与した上で、そのポイントを電子マネーに換金できるようなアプリ、仕組みを整えていくことといたしました。

その後、市で検討を重ねた後、令和5年11月に70歳以上を対象とした健康ポイント制度

の素案を公表し、この基本コンセプトに対して市民から多くのご意見を頂戴いたしました。市民からは、多様な趣味活動も評価してほしい、社会貢献活動のポイントを上げるとよい、あるいは、70歳になる前から活動を推奨するべきといったご意見を頂戴いたしました。こうしたご意見も踏まえまして、令和6年9月には、対象年齢を40歳以上に拡大し、人と会うことや社会参加、日常の健康管理など、各種メニューのバランスに配慮したポイント制度とする実施案を公表いたしました。この実施案につきましては、令和6年12月から今年1月にかけてパブリックコメントを行いまして、市民からアプリに対する期待の声を多く頂戴したところでございます。その後、関連予算の議決を経て、現在、令和8年4月からの実施に向けて準備を進めている状況でございます。

資料を1枚おめくりください。

続いて、令和8年度に向けた今後のスケジュールについてご説明いたします。

まず、健康アプリを実際に市民に試していただき、様々なご意見を頂戴するため、先月、市民モニターの募集を行いました。1か月間という募集期間でありましたが、100名の定員に対しまして合計2,930名もの市民からご応募をいただきました。多くの市民から高い関心が寄せられたことも踏まえまして、システム環境やサポート体制などを検討し、最大限の拡充を図り、定員を500名に増やすことにいたしました。

モニターの期間は8月から2か月間を予定しておりまして、日常的なアプリの使われ方を把握し、さらには市民が実際にアプリに触れて感じた操作感等のユーザーインターフェースに対する感想、意見を踏まえながらアプリの改善を図ってまいります。このモニターの実施状況等につきましては、次回、第5回の委員会でご報告をさせていただきたいと考えております。

その上で、10月頃には市民モニターで得られたご意見や委員の皆様のご審議の内容を踏まえまして、ポイント設計の最終案を整えたいと考えております。同時期には、市民がアプリを通して健康増進につながる幅広い活動を楽しんでいただけるよう、イベントやサークル活動を主催する団体への説明、アプリへのイベント登録を開始し、並行して民間企業にも広く参加協賛を募集してまいりたいと考えております。

その後、令和8年2月以降には、広報さっぽろなどを用いて制度の周知を図るほか、対象者に通知を送付するとともに、サポート体制を整備し、令和8年4月の事業開始に向けて準備を進めてまいります。

今回の委員会では、令和8年度のアプリのリリースに向け、アプリの魅力、実効性を高め、多くの市民が楽しみながら自然に健康になれる仕組みを整えていく上で、皆様の知見を仰ぎたいと考えております。

資料の説明は以上でございます。

○梶井委員長 これまでの経緯と今後のスケジュールということで、簡潔にご説明をいただきました。

何かご質問があれば承りたいと思いますけれども、ございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○梶井委員長 100名の募集だったところ2,930人からの応募があったということで、市民の皆さんの関心が本当に高いのだなと思いました。そして、そこから500名が選ばれたということですね。

質問になりますが、その500名の内訳について、年齢や性別などがあるかと思いますが、何かコントロールされたのでしょうか。

○事務局（横谷調整担当課長） 市民モニターにつきまして、2,930名の内訳をご報告いたします。

65歳以上の方からは1,121名、40歳から64歳の方からは1,809名のご応募を頂戴いたしました。比率としては4対6ではあるのですが、モニター500名につきましては、それぞれの年代を半分ずつということで、250名ずつ、無作為抽選を行い、選定させていただきたいと考えております。

○梶井委員長 若い方からの応募が若干上回ったということでございました。

それでは、時間に制限もございますので、次に進めさせていただきたいと思います。

次は、本日のメインテーマになるかと思いますが、議事の二つ目の（仮称）健康アプリの概要について、意見交換の前に事務局からご説明していただきたいと思います。

○事務局（横谷調整担当課長） 引き続き、私からご説明申し上げます。

お手元の資料で申し上げますと、資料4のA3判の横の資料を先にご覧ください。

こちらは、第3回目の委員会までにご議論をいただいた内容を踏まえて健康アプリの方向性を整理したものとなっております。

上から順に、健康づくりでは、歩くことの習慣化や日々の健康管理により、体調変化を捉える仕組みなどに関してご議論をいただきました。

その下のつながりという視点からは、人との関わりの重要性や多世代間の交流、高齢者と集いの場所を緩く結ぶ仕掛けの構築などに関してご意見を頂戴いたしました。

その下の動機づけでは、これらの活動に主体的に取り組める環境の仕組みの有用性や、ポピュレーションアプローチの視点から、一人でも多くの方が参加できる施策の検討に向けてご意見をいただきました。

最後に、デジタル活用の観点からは、デジタル技術を活用し、楽しみながら活動できるような仕組みとしてのアプリの制作やデジタルディバイドの解消に向けても活発なご議論をいただけたところでございます。

この回までの委員会で頂戴したご意見、知見を踏まえて、この間、健康アプリの原型を作成してまいりました。

次に、A4判横でホチキス留めしている資料で、現時点での健康アプリの概要をご説明させていただきます。

アプリのリリース時期は令和8年4月を予定しており、対象は40歳以上としております。

このたびの健康アプリは、主に高齢期の市民を対象としたライフコースアプローチを意識した内容となっており、ユーザーインターフェースのデザイン面では、誰にでも一目で分かるようなシンプルで分かりやすいデザインを追求しております。ホーム画面では、札幌のシンボルであります時計台をデザインしておりますが、四季に応じてライラックの花が咲き、雪景色などにも変化もいたします。また、毎日使い続けていただけるように、市内10区で親しまれているマスコットキャラクターを配置しております。

アプリの概要は、「歩くこと」「健康管理」「人と会う」の三つを柱とした日常の取組を記録して活動を見える化し、その活動に応じてポイントを獲得、そして、そのポイントを電子マネーに交換することや、抽選に応募できるというものでございます。

1枚おめくりください。

具体的なポイントの獲得方法、ポイント数のイメージをご説明いたします。

この内容は、現時点での事務局としてのたたき台であり、今回の市民モニター時に試行的に設定する内容にもなります。これに対する皆様のご意見や今後の市民モニターの結果も踏まえて、最終的な案を整えたいと考えているものでございます。

「歩く」につきましては、スマートフォンを持って歩くことで、歩数をカウントし、その歩数に応じたポイントを獲得できます。厚生労働省が作成しました「健康づくりのための身体活動・運動ガイド2023」では、高齢者については1日約6,000歩以上に相当する身体活動を推奨されております。そのうち、家事などスマートフォンで捕捉し切れない生活活動は約2,000歩に相当すると言われております。また、一昨年、大西委員からご教示いただきましたエビデンスからも、高齢者の場合は歩き過ぎても健康を害する場合がありますことに留意が必要と考えております。そうしたことから、国のガイドラインの6,000歩から2,000歩を差し引いて、4,000歩をポイント付与の上限としたいと考えております。具体的には、2,000歩到達時に1ポイント、以降、1,000歩ごとに4,000歩まで段階的に1ポイントずつ付与したいと考えています。

このほか、歩くことの習慣化を目指す観点から、1週間毎日継続的に取り組んだ方を対象にボーナスポイント40ポイントを付与したいと思います。

資料を1枚おめくりください。

「健康管理」についてですが、日々の血圧や体重の入力、健康診断の受診、健康のチェックを行うことでポイントを獲得できます。日々の血圧や体重の記録、発熱や転倒の有無などの振り返りでそれぞれ1ポイントを付与したいと考えています。また、毎日健康に関する目標を立て、その達成状況を評価するほか、厚労省が作成しているフレイル予防のチェックリストへの入力、健（検）診の受診などでもポイントを獲得できるようにいたします。

さらに1枚おめくりください。

「人と会う」でありますけれども、事前にポイントの対象として申請し、登録されたイベント、活動等において、主催者のご協力を得て個別のQRコードを掲示していただきま

す。市民は、そのQRコードをアプリで読み込むことでポイントを獲得できます。イベントや市民サークル活動などに参加することで20ポイントを獲得できる仕組みを整えていきたいと思います。

さらに1枚おめくりください。

それ以外に、その他のメニューとしまして、お楽しみの要素として、アプリ上でのアンケートへの回答や、アプリ上で配信される健康に関する動画の閲覧、ウォークラリーなどのミッションの達成でポイントが付与される仕組みがございます。

次に、介護保険制度において取り組んでいる介護予防やボランティア活動の一部につきましても健康アプリに取り入れることとしております。具体的には、地域の会館などで集まって活動を行う介護予防教室や、介護保険施設で行っているボランティア活動への参加について、ポイントを獲得できるようにいたします。また、認知症当事者もチームの一員となって地域で支え合う仕組みである「チームオレンジ」の取組や、介護予防の取組を地域で担っていただける方を養成する講座への参加についても対象とするほか、要介護2以上の認定を受けている方には、アンケート調査へのご協力などを通してポイントを獲得できる仕組みを設けたいと考えております。

資料を1枚おめくりください。

これらの活動でためたポイントにつきましては、電子マネーに交換でき、例えば、モバイルSuicaに交換することで、JRや地下鉄、バス、市電、電子マネーに対応しているタクシーでもご利用できます。また、40歳から64歳までの方は、抽選でのポイントのプレゼントの対象となります。

私からの資料の説明は以上でございます。

○梶井委員長 まず、一昨年までの委員会での議論をすっきりまとめていただきまして、ありがとうございます。また、それを踏まえて健康アプリの内容がだんだん具現化してきたところもしっかりと見てとれまして、これからさらに精緻化していくのだなと実感したところでございます。

いよいよ議論に入っていきたいと思っておりますけれども、ここまで具体化されてまいりましたので、本日の目標としては、個別のポイントのつけ方などについて、また皆様の知見を伺って、さらに議論を深めていきたいと考えております。誰一人取り残さないということも含めて、それから、もっと使いやすく、楽しく、また、市民から愛される健康アプリの形に近づけていけたらと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

前回と同じように自由に議論をさせていただきたいと思いますが、まず、火つけ役というわけではないですけれども、最初に一つ質問を申し上げたいと思います。

ポイントの中で、要介護2以上の認定を受けている方が動かななくても参加できるよう、何らかのアンケート調査に回答した場合にはポイントを差し上げるということでした。細かいようではございますけれども、要介護2以上ということに関して、そこで線引きをすることは大丈夫でしょうか。

○事務局（横谷調整担当課長） 現時点では事務局の案でございますので、これにつきましても今日の委員の皆様のご意見、あるいは、市民からのご意見も踏まえて改めてしっかりと検討を重ねていきたいと考えております。

現時点の事務局の案として要介護2としておりますのは、様々な国のデータやエビデンス等を踏まえますと、いわゆるADLが低下していく、歩くことが難しくなっていくライン、また、健康寿命の検討に際して補足的な指標として使われているラインが要介護2であるということも踏まえまして、そちらで一旦線引きをさせていただいたところです。

○梶井委員長 線引きについても専門家の皆様の知見を集めて説得的なものにいただければと思います。

最初に質問をさせていただきましたけれども、これからは皆様からご意見をいただきたいと思います。

事務局からご説明をいただきまして、ポイントのつけ方、それから、今、要介護2でいいのかというご質問をさせていただきましたが、皆様のご意見、お気づきの点、ご感想でも結構ですので、いただければと思いますが、いかがでしょうか。

○平本副委員長 まず、歩くことに関して、4,000歩を上限として、2,000歩、3,000歩、4,000歩で1ポイントずつ、4,000歩歩くと3ポイントつくということだと思えるのですけれども、4,000歩までは毎日歩いたほうが良いというのが基本的な考え方ですね。そうであるならば、少しインセンティブを傾斜的にして、2,000歩、3,000歩は1ポイントだけで、4,000歩に行くともう少しポイントが増えるということもありかなというのが一つです。

それから、1週間毎日4,000歩を達成すると40ポイントですが、7日間毎日4,000歩歩くのもちょっときついので、1週間のうち5日歩いたら20ポイント、6日歩いたら30ポイントというように、少しハードルを下げてもポイントを付与するということもありかなと思いつながらお話を伺いました。

それから、次の健康管理です。

これにつきましては、基本的にはユーザーがご自身で血圧なり体重を毎日入力することによってポイントがたまっていくと思うのです。こういうものは性善説でいいと思うので、でたらめの数字を入れることをどうやって排除するかという議論をする必要はないと思うのですが、例えば、今、スマートウォッチや体組成計のアプリといったものでこういう情報が取れるようになっているので、来年4月に間に合わなくても構わないのですが、将来的にはそういったアプリとうまく連動しながらデータが自動的に入る、しかも、より正確なデータが記録されることになっていくといいのかなと思いつながらお話を伺いました。

それから、イベントなどのところでは。

民間企業が主催するイベントについて、協賛内容によっていろいろポイントがつくということですが、例えば、大学などもいろいろなイベントやセミナー、公開講座をやっていますし、北大には総合博物館があって、市民の方にご自由にきていただけるよう

になっています。原資をどうするかというお金の問題は脇に置いておいて、北大も札幌市と協定を結んでおりますし、民間に限らず、市内の大学で市と協定を結んでいるところのイベントなどもこういうところに入ってきてもいいのかなと思いました。

それから次に、これはもっと大きな話ですけれども、今回、健康アプリのポイントというのですが、この考え方をもう少し拡大していくと、いわゆる地域通貨的なものに広がっていくことができるようになるかもしれません。そうすると、単なる健康だけではなくて、いろいろなボランティアの活動であるとか、例えば、子ども食堂での活動といったものもポイントを付与していくことができるようになるかもしれない、ウェルネスとかウェルビーイングという観点から見たときに、歩くとか、人と会うということをさらに広げて、最終的には地域通貨のような立てつけにできるといいなという、これはもう夢のような話でございます。

もう一つ、最近、脳トレのサイトなどがありまして、私も毎日、朝起きると認知症予防のゲームを7分ぐらいやっているのですけれども、脳の健康ももちろんこの健康アプリの中身に入ると思うし、認知症予防もとても大事なことだと思うのです。ですから、これも来年4月からというよりは、もう少し中期的に見た場合に、脳トレみたいなものともうまく連携して、このソフトの中でクローズドに完結するというよりは、いろいろなものとながれる可能性を残したアプリであるほうが将来的な発展性も高いのかなと思いました。

○梶井委員長 今、平本副委員長から、可能性も含めて発展的なポイント付与のアイデアをいただいたところでございます。ほかに皆様からいかがでしょうか。

○山本委員 具体的な制度設計というか、アプリのイメージが出ているので、大変話をしやすくなった感じがします。大きな変化として、前回の議論で、健康を維持するためには、やはり運動とか、健全な生活など、フィジカルな話が多かったのですが、今回は、社会参画に対して大きなポイントを付与するという方向がよく出ていると思います。

個人的な話をすると、去年の冬にさっぽろ圏スマートアプリというアプリがあって、そこでウォーキングのコンペがありました。それがいろいろなパターンでやったのです。職域参加というものがあって、私は大学の若者から誘われて、1か月間、市立大学、北大、北海学園など、大学対抗で競っていたのです。そのときに非常に思ったことは、もともとは歩くことから入るのだけれども、コンペティションが入ることによって、何となく連帯感が出てくるというのと、その中にいろいろなパターンのランキングがあって、競争の中からいろいろな社会参画的なもの、何となく一緒にやっているという感じが出てくるのです。これは単にポイントという換金性の話ではないところにある種の快感が出てくる、社会参画と簡単に言うのだけれども、だから何なのといったときに、社会参画を直接の目的にすると形が先になってしまい、ちょっとやりにくくなるのです。ところが、運動というものを表に出して、その結果、社会参画ができてきて、データが出てくるという、この形について僕はすごく納得できました。

二つ目です。

今回の制度設計で大きいことは、敬老パスというのは70歳でどかんと来るものだけでも、今回、この制度では65歳からポイントが付与されます。それから、40歳から64歳までは、抽選だけでも、緩いポイントが出てきます。シームレスというのですか、40歳ぐらいからじわじわじわじわと移行していく、そういう形も長期的な安定性を考えたときに、70歳までずっと何もなくて、いきなりどかんと来ると、実際、私には来たのですけれども、唐突感があります。やはり、こういった慣らしの期間があるのは、この制度の非常に面白いところだなと思います。

もう一つ、アプリにはいろいろなデータが集まってくるのです。私は情報系の人間なものですから、ここで集まるデータをやはり活用していただきたいのです。いろいろなデータを例えば、データを自分で使って何かサービスが得られる、あるいは、職域の健康管理にこのアプリのデータが使える、もっと言えば、本当はプライバシーが全部消えていて、コーホートのエリア、あるいは、年代ごとの平均のウォーキングの歩数など、いろいろなバイタルのデータを札幌市民や札幌の会社がうまく活用できるようになるといいと思うのです。

ただ、こうやっていっぱいデータを入れて、ポイントになるからというのだけでも、そのデータがただたまっていて、メモリーを消費して、それがだんだんゴミになっていくというのは寂しいので、ぜひその活用も一緒に考えていけたらと思います。

○梶井委員長 貴重なデータを札幌市全体のためにどう活用するかという提言もいただきました。ほかにございませんか。

○大西委員 ただいまのご説明を伺って、まず、シンプルに、使いやすく、何を目的としているか分かりやすくということで、歩くと健康管理と人と会うという三つの柱で、ホーム画面も非常に分かりやすく、ボタンも大きくて、高齢者の方も使いやすいですとか、ホーム画面にポイントが出ていて、開くたびにポイントが増えているのが確認できるのはいいなと私は思っています。大体のアプリで何歩歩いているというのはよく出ていたりするのですけれども、自分が今ポイントをどれぐらい獲得できているかというのは出ていないことが多いですね。何回もボタン押してポイント確認をして見るとなると非常に面倒くさいということもありますし、人と会うということも含めたポイントがホーム画面にどんと出てくるのはデザインとしても非常にいいのではないかと思っています。

私は、恥ずかしながら中央区のキャラクターを存じ上げていなかったのですけれども、キャラクターが出てきてメッセージを出してくれるというのもそうですし、札幌市ならではの、時計台のデザインですとか、季節によって変わるというのも非常によいデザインだなと感じております。

これまでの議論で、やはり身体活動で、まず、基本的なところは歩くという話でしたので、それが反映されているというところと、孤立、孤独が要介護状態につながるということを含めると、社会的なつながりをいろいろな形でいかに持ち続けることができるかがやはり人と会うという意味では重要と考えています。

今、平本副委員長、山本委員のお話を伺って、ポイントの取り方にグラデーションをつけるところは私も賛成で、少しずつ難しい目標をクリアできていくと、少しずつ傾斜がついていてポイントが多くなっていくというところも重要なというのが一つです。

あとは、やはり継続するというのが非常に重要です。札幌市の職域の方を対象としたアプリの事業に私も参画したことがあるのですが、スタート当初は皆さんアプリをダウンロードして一生懸命やるのですが、時間とともにアプリを開く人が減ってくるのが目に見えて分かるのです。毎日、開く、何かしらどこか押す、それが日課になるものいいかなと、そういう意味では、低いハードルでも毎日クリアして少しずつポイントが変わっていくというところが重要かと思うのです。1週間、7日丸々というのはやはり大変ですから、週5日だったら何ポイント、6日なら何ポイント、7日間続けられたらさらに何ポイントみたいな、ボーナスポイントにも傾斜をつけて、いかに継続できるか、場合によってはマンスリーチャレンジみたいな感じで、月に何日以上達成できていたらプラス何ポイントみたいなものがあったとしても、より長期的な視点で続けてもらえるのではないかと思います。

あとは、健康管理に関するデータを毎日入力するというのが非常に手間なので、それをどれぐらいやってくれるか、モニターのところでも確認は必要だと思うのですが、やはり面倒くさいです。その分ポイントはつきますよというインセンティブで何とかやってもらうということですが、先ほど平本副委員長からもお話があったように、歩数は少なくともスマートフォンのデータから引っ張ってくることができていますから、例えば体重計もBluetoothでデータを取れ、ウェアラブルデバイスでいろいろなデータが取れているので、そういったものが自動的に反映されて、自分で入れなくてもポイントがある程度獲得できる形になると、さらに使っていただけたらと思っています。

今回、転倒した、しなかったというものを入れてもらうようにしたところは、私も少し意見を述べさせていただいたところです。高齢者の転倒に関する調査などを行うときは、「過去1か月でどれぐらい転びましたか」とか、「過去1年間で何回ぐらい転びましたか」と質問票で聞いたりするのですが、それは記憶に頼る部分が大きくて、「ちょっとつまずいた」「グラッとしたけれども、何とか踏みとどまった」というところも含めると、実際に覚えている方はほとんどいません。それを前向きに取っていると、比較的正確に年間どのくらい転んでいるのかというデータが取れるので、日々入力してもらうのはどうでしょうかとアイデアを出したところです。転倒が札幌市民にどれぐらい起こっているのかという客観的なデータはなかなか取れませんし、転倒回数が多い方には何かメッセージが届く、あるいは、介護予防の事業へのお勧めなど、入っていたことによってメリットがあった、何か自分に必要なサービスのお知らせが届いたという形で、意味なくただデータを取られているのかみたいなイメージではなく、個人にメリットがあるということで、このデータの蓄積がされていることが分かるようにすると非常によいのではないかなと思います。

そういう意味では、高齢福祉の部署だけではなくて、保健部門といったところでも健康管理、健診データに基づいた保健指導をやっていますので、今回、健診を受けた、受けないうとかという、健診会場でQRコードもあるのかもしれませんが、何かしらデータを登録するとフィードバックがある、それによって市民全体の健康度にも役に立つところがよりプッシュできるとよいのかなと思います。

例えば、ポータルサイトがあるといいとは思っているのですが、アクセスすると現在の登録者数がリアルタイムで見える、今、何区がすごく登録されていますよというものが区ごとにあったら、うちの町内会でもちょっとやってみようみたいなことも出てくるかもしれません。そういうポータルサイトでほかにもやっている人がたくさんいるのだというつながりも、人とのつながりというところで一つのアイデアになるのではないかと思います。

それから、私のバックグラウンドが公衆衛生ですからそういう話になるのですが、体温を入れて、どの区で発熱している人が多いというものがマップ上で見えると、例えば、新しい感染症などが今後発生してきたときに、発熱者が中央区で多い、白石区で多いというようなところが見えてくると、医療機関と連携をして、今どういう患者さんが増えているのか、そういうところで市としての感染症対策にも使える可能性があります。そのために皆さんから体温を入れてもらうのですよという説明があると、具合が悪くなって熱が出たら入れてみようかな、みたいなことではなくて、平時から熱がある人がどのくらいいるのか、いないのかというデータが集まるようにしていったら、それがポータルサイトのなところで見えるとなると、非常にメリットがあるのではないかと感じております。ですから、これから少しずつ改修が必要だと思うのですが、そのあたりも含めてぜひデータも活用していただきたいと思います。

それから、ゲーミフィケーション、楽しくできるということが重要かと思っています。ランキングはモチベーションにもつながったり、みんなで協力して頑張ろうとなったりするので、非常に大事だと思います。ポイントを達成していくとメダルがもらえるようになっていく、個人で達成できる、長く続けて使っていくと何とかメダルがもらえました、そういうものをコレクションしていくという、ポケモンなどを集めていくイメージに近いかもしれないのですが、そういうものを集めていったらコレクションが完成しますみたいなところも一つあると思います。

ただ、このアプリで全てのゲーム性を担保するのは、改修、維持が難しいので、例えば、ほかのアプリでゲーミフィケーションのところは楽しくやるのだけれども、そこでの何かを獲得するために一生懸命歩いていたら、それが連動してこの札幌市のアプリにも歩数が反映されていて、自然と一石二鳥でポイントがたまっているみたいなところで、あまりこのアプリを複雑に改修していくというよりは、いかにほかのアプリと連動してとか、こういうものと一緒に使うと楽しくポイントも裏でたまっていますよと、これがメインでなくてもいいというか、セットでダウンロードしてみてもいいんじゃないかという普及のさ

せ方もあるのではないかと思います。

○梶井委員長 ありがとうございます。

大西委員のご意見に畳みかけて私からも申し上げます。

いろいろな観点をお話いただきまして、ハードルを低くして多くの人が開きやすいように、それから、データを入力しやすいように、モチベーション、インセンティブをどうするかというお話もいただきました。

ほかのアプリとも連動させて、この健康アプリだけをあまり重たくしないようにというご意見があったわけですが、このアプリに魅力的でわくわくするものをたくさん集めて、誰一人取り残さないといったとき、誰が取り残されやすいのだろうと考えたのです。これは自分にとって参加しにくくて、わくわくしないという方も市民の中にいると思うので、そういう観点もどこかに置いておかななくてはいけないのではないかと思います。健康アプリに関して、市民の中に「ポイ活格差」が生じないように留意する必要もあると思います。

つまり、このアプリは、元気な人がさらに元気になってポイントが集まるようにというところにかなり力点が入っているのですけれども、ぎりぎりの方もいると思うのです。例えば、バスなどに乗っていても、スティックを2本持って一生懸命歩いている方は、1日100歩歩くのも大変なことかもしれない。でも、1日1,000歩歩かないと、ポイントには追いつけないのです。そういう方々のポイントはどうすればいいのだろうということも、やはりどこかにないといけないのではないかと思いますというのが一つです。

それと、もう一つ、参加しにくい人で私がイメージしたのは、自宅介護をされている方です。その方は、人と会おうにも家族を介護しているからケアマネジャーとしか会えない、いろいろなことに参加したいのだけれども、すぐに出ていけないなど、そういう自宅介護をなさっている人には、デフォルトとして、まず、家事に2,000歩相当で1ポイントをとということであれば、自宅介護をしている方には2ポイントを先につけてしまうなど、そういう「ポイ活」に参加したくても参加しにくい人も洗い出して、その方々への対応も考えておく必要があるのではないかと感じているところです。

ほかにございませんか。

○高野委員 今の梶井委員長に共感するところが多いのですが、モチベーションをどう上げていくか、ポイントにいろいろ傾斜配分をつけたり、メダルをつけたりすることと同時に、ポイントを稼ぐために運動するという感じになってしまうと非常に辛いということもあるのではないかと思います。6日間4,000歩歩いて、今日はちょっと調子悪いのだけれども、今日続けないと40ポイントもらえないわ、だから頑張るとにかく行くかということが365日、五十何週続くというのはちょっと辛いという感じもするのです。だけど、モチベーションがないと、なかなかやってくれないという、そこは非常に難しいところだと思います。

ほかの都市の事例の資料をいただくと、いただけるポイントに上限をつける、ポイント

はS u i c aのポイントに変えることもできるし寄附もできる、そして、その寄附したことの写真の後から送ってもらうなどのやり方もあると思います。

それから、ポイントのつけ方も、今の梶井委員長のお話のように、例えば、自分で目標を立てて、それぞれ自分の目標をクリアすればポイントがつくようにすると。だから、極端な言い方ですけども、歩くのが非常に大変な方は1日500歩でもポイントがつくようにして、あまりポイントを稼ぎまくってやるぞということではない仕掛けも少し必要ではないかという感じと、同じことで恐縮ですけども、モチベーションを上げるという両方のバランスが大変かなということが一つです。

それから、もう一つ、このデータをどう活用するかという話を皆さんがされていたのですが、我々はモビリティーマネジメントということで、車ばかり乗っている人を公共交通に乗せるということを20年ぐらいずっとやっているのですけれども、そのときに、トラベル・フィードバック・プログラムというものがありまして、自分がどういう交通行動を取ったかを人と比べて教えてあげるのです。あなたは車ばかり乗っていますよ、ここの部分は車ではなくて公共交通を使えますよね、使うとどのぐらいカロリーが消費できるなど、そういうアドバイスをしながら転換しようという活動をずっとやっているのです。それと同じように、要は、1か月なら1か月単位が終わったら、あなたは、今月、どのぐらい歩いたと、歩行距離はこのぐらいで、こういう活動をされましたねと。これは、例えば、さっきの皆さんが言うように、区の中ではこのぐらいの位置にありますよ、かなり頑張っているほうですねなど、そういうやり方で自分の行動を振り返って教えてあげることができると思うのです。それもすごく重要で、もうちょっと歩けるかなとか、今週は歩き過ぎたから調子悪いのかなど、そういう振り返りもできるような情報、データの使い方ができるのではないかと思います。

また、データの使い方ということで言いますと、こういう具合でポイントを稼いでいる人はこのぐらい健康ですよというのは、多分、これを積み重ねていくとエビデンスになります。このポイントを月何百ポイント稼いでいる人と稼いでいない人を比べると、ほら見てください、健康になっていますよということを示すことが、1年、2年、もっとかかるかもしれませんが、エビデンスにもなるので、そういうふうにもこのデータを使っていたいただければいいかなと思いました。

それから、分析ということと言うと、ここの場所でQRコードをやった人はどのぐらいいるとか、イベントをやると、ここのQRコードを読み取る人が相当増えるなど、まちづくりでいろいろなことをやる中で、どのぐらい人が増えていくということも分析できるのではないかと思います。

このデータは非常に活用できると思いますし、ほかのアプリでも、誰かを誘えばポイントがつくというものがありますよね。モニターのときはできないでしょうけれども、本番になったら、誰かを誘ったら何ポイントつくということもできるのではないかと思います。

最後に、65歳以上の人はフレイル予防があるのですけれども、仮に40歳のまだ相当元気な人がこれをしてどういうお返しができるのかということを考えると、今回の立てつけでは40歳から64歳の方は、ポイントはもらえずにプレゼントに応募できるということで、その報酬の部分は65歳以上に比べると緩い感じがするのです。ただ、これをやることで、自分の生活を振り返り、健康生活に近づけると。また、プレゼントという意味では、飲食、酒をどのくらい飲んだかというものも重要かもしれません。1日3合飲んだとか5合飲んだと入れてみたら、ちょっと飲み過ぎだなと、あるいは、40歳ということを考えると夜遊びし過ぎたなとか、65歳以上とちょっと違うことを考えていかないと、40歳、50歳の方にはなかなか使ってもらえないのではないかと感じております。

○梶井委員長 40代、50代に関しては、むしろ自己健康管理に使っていただくというメリットもあるかと思います。もう一つ、私からです。

今、高野委員がおっしゃったように、とにかく行政が市民の健康を支援するということですから、行政がやることですので、バランスを考えて目配りするということがすごく重要だと私は思うのです。民間がやる場合は自分たちの利益を考えますけれども、行政がやる場合はどこまで目配りを広げられるかというところも大切にしないといけない。

それから、先ほど山本委員が、運動を通して社会的にいろいろな人とつながっているのだという実感が得られるのではないかとおっしゃいましたけれども、ひょっとしたらこのアプリで、みんなも歩いている、自分も歩いているというところでつながりを実感していただくと、社会参加の機会が少ないような方にとっても、色々な効果があるのかなということもふと思ったのです。私は、誰一人取り残さないというところで、取り残される層は何だということを、資料を見ながらずっと考えてきたものですから、そんなことも感じたところでございます。

ほかの委員の皆様から、またいろいろな違う観点でも結構ですので、何かございませんか。

○大西委員 今もお話にもあったように、人とつながるというところが、今の仕組みだと出かけないとつながっていない判定になってしまうところは、ちょっとハードルが高いところかなと思います。

この機能を入れられるかどうかは分かりませんし、費用もちょっとかかると思うのですけれども、ブルートゥースなどで、アプリが入っている人同士、家族でもいいので、ピッと通信すると、誰かと一緒にいたということだけでも人とつながっていることになります。そして、「共食」といって、誰かと一緒に食事をするということがメンタル面にもすごくいい効果がある、鬱を予防するような効果が見られるというエビデンスもあったりします。ですから、コロナのときに、すれ違うと濃厚接触するみたいなものがあつたと思うのですが、誰かと一緒に食事をするときに、お互いアプリが入っていると通信される、家族とのつながりでもポイントがたまるとなると、外出ができない人であっても、お手伝いに来てくれた家族の人とちょっとおしゃべりするだけでも1ポイントが入りますよ、た

だ、家族何人とも通信して何ポイントも稼ぐことができしまうと困るので、1日1ポイントまでという制限が必要かもしれませんが、簡単な人とのつながりでも何かしらポイントが入る機能があるとさらによいと思いました。

もう一点、やはりこれを使っていることでコミュニケーションが広がるというところが重要なと思います。健康管理で自分のデータを入れていると、それを例えば薬局の薬剤師がこれを入れていますか、つけていますかと言って、画面を見せると毎日結構つけていて偉いんですねとか、転倒も全然していないし、いいですねとか、薬を飲んだ、飲まないというのを入れるようなので、飲み忘れがなくて素晴らしいですねと褒められると、それがモチベーションになって、また頑張ってみようかなとなると思うのです。かかりつけ医からでもいいと思うのですが、「札幌市でやっているアプリを使っているかい、どれどれ、ちょっと見せて」という会話があったりすると、それも患者としては先生に今日外来で褒められたということが、また使っていこうかなというモチベーションになると思うのです。

せっかく入れている健康管理を誰かが見てくれて、いいですね、でも、ここはちょっと心配ですねとか、先ほど車に乗ってばっかりですよというフィードバックの話もありましたけれども、そのように自分で管理しているものに人からのフィードバックがあるというのは、すごくモチベーションにつながっていいのではないかと思います。

○梶井委員長 ほかにございませんか。

○山本委員 今の話は非常に示唆的ですが、私も実際に健康アプリ的なものを使って感じたことですけれども、一生懸命歩くのです。ランキングが出てきて達成感があるのだけれども、非常に多様になってきますよね。そうしたときに、いろいろなデータも入力します、歩きます、社会参画をしますと、多分、やっている、何でこんなに苦労しているのだろうということになるのです。

我々はこのサービスを何となくアップロード側の立場で考えているのですけれども、端末から来るというリターンの方に少し工夫をしないと、先ほどおっしゃったような、最初は盛り上がって指数関数的に落ちていくというパターンですよ。神経への刺激と同じです。それにまたテンションをかける仕掛けが要るのではないかと思います。

前のアプリで職域ランキングや年代別ランキング、性別ランキングというものがあって、どのゾーンで自分は見栄を張れるかみたいところで頑張ってしまうのですけれども、先ほど梶井委員長がおっしゃったように、いろいろな人の属性がありますよね。例えば、障がいでは歩けない方の中の社会参画のランキング、あなたは、今、いいところにいますよというのは、これはギネスブックと同じなのです。ありとあらゆるパターンを探していくと、あなたは何かのところで1位になる、そういうものを出してくれるのです。今までの表彰制度などは、自分からエントリーして頑張るのです。だけど、一番うれしいのは、誰かが見ていてくれて評価してくれているということです。

ただ、これをどこかのアプリの開発者に全部投げても、こんなのは無理です。そこで、

やはりデータのオープン化なのです。例えば、ここで集まるデータがあるルールを満たしたときに、当然、参加している人もそこまで使っていていいですよ、そのデータを使う側もこの範囲なら使っていていいですよということで、自発的にみんなで考えて、うちはこんなものをつくってみたよ、どうだろうねという感じで盛り上がっていくと、もしかすると、札幌が健康アプリの開発のメッカになるかもしれないですね。そういう夢があってもいいのではないかと思います。ただ単に福祉の問題だけではなくて、技術開発とか、そこから出てくるグリーンイノベーションみたいになっていくといいのではないかと、そのためにもデータの利活用をちゃんとやりたいねというのが私の今の気持ちです。

データが開発会社に全部取られていて、これはそういう条件ですからの一言で終わってしまう、これはほとんどのところで起こるのです。特に健康系のアプリの場合には、データのセキュリティーやプライバシーが極端に厳しくなるのです。そうすると、何もしないのが安全という行動原理になってしまいます。ですから、そこはぜひ、なるべく開くように制度設計なりを考えていただきたいと思います。

○梶井委員長 ほかにございませんか。

○高野委員 前にもお話ししたかもしれませんが、私はつるつる路面对策というものをずっとやっています、冬になりますと、つるつる予報というものを毎日出しています。道新にも載せていただいて、テレビでも取り上げてくれるのですけれども、つるつる路面の状況を1から3までの数字で表現した「つるつる指数」というものを毎日出しているのです。

冬になりますと、特に高齢者の方は、つるつる路面を怖がって外に出なくなるというのがすごく出てくるのです。特に、つるつる予報の3になりますと、実際はかなり路面が危険な状況になります。3は年間で10日も出ないのですが、できれば、冬だけでもいいのでアプリに表示していただくと、今日は1だから冬でも出歩こうかということにもなるのではないかと思います。それと、転倒防止にも役立つかもしれません。3になりますとかなり厳しい路面になるので、それ相応の注意と、つえを持って歩くと転倒防止につながると思います。

それから、研究レベルですけれども、スマホにはXYZ方向、3次元の加速度計が入っているのです。それを、あるソフトを使って歩行安定度というものを持っておいてもらって、いろいろな路面を歩いてもらう実験をしますと、乾燥路面だと、結構みんな歩行安定度という指数が安定しているのです。ところが、つるつる路面を歩くとすごく安定度が下がる、非常に乱れた加速度になります。これはスマホでやれますし、歩行安定度もアルゴリズムを入れるとすぐさま計算できるので、あなたの「歩行安定度」というものがスマホを持っていただけで計算ができるのです。すぐにではないですけれども、ゆくゆくはそういうものもやっていくと、自分の中で今日は調子がよくないから、あるいは、路面が危ないから安定度が低いなど、日々の自分の安定度の変化を見ていくと、いろいろなことにもつながるかもしれません。

まだ可能性の段階ですが、スマホはいろいろなデータ取得という意味ではすごいものなので、そのデータをうまく活用していただくと、次にいろいろな発展があるのではないかなという気がします。

○梶井委員長 先ほど、大西委員が各区のキャラクターイメージも画面に出るのがいいなおっしゃって、私もそう思ったのです。そのキャラクターが、今、高野委員がおっしゃったように、今日の路面はつるつる3ですと出してくれるなど、どういうタイミングでどういうメッセージを出すかも意外と工夫のしどころかなと思いました。

○高野委員 天気や気温なんかも出してあげるといいですね。

○梶井委員長 そうですね。それから、むきになってやり過ぎてしまう人がいるとおっしゃっていましたが、むきになってやっていませんかみたいな感じで出すなど、メッセージも出し方によって活用できるのかなと思ったりしました。

もう一つ申し上げれば、調剤薬局の薬剤師はいいかもしれませんね。どうですかと、調剤薬局の薬剤師は優しいではないですか。でも、その後、会話が續かなくて終わってしまって、薬剤師ももっと話したいのという雰囲気なのですね。

調剤薬局はすごくたくさんあるし、そこに札幌市の健康アプリがこうですと皆さんに知らしめて、熟知していただいて、特に来ている高齢者にはやっていますかとお声がけくださいみたいな感じのことも周知されたらいいなと感じました。

ほかにございませんか。

○平本副委員長 今、お話を伺っていて、一つ素朴な疑問が浮かんだのですけれども、健康ポイントの有効期間はどれぐらいを想定されているのですか。

○事務局（横谷調整担当課長） 現時点でまだ決定はしておりませんが、他都市の事例も参考にしながら検討しております。

ずっとためっ放しになると、それで飽きてしまうということもありますので、適度に期限を設けてまたリスタートという形を取るところが多いのかなと思っております。そういう意味では、年度ごとで変えていくというのが一つの案として考えられると思っております。

○平本副委員長 私は、ためられてもいいのかなと考えております。要は、少しずつのポイント、1年間で300ポイントとか、500ポイントしかたまらないのだけれども、5年たまると結構大きくなります。無制限にためるのがいいかどうかは分かりませんが、ポイントのうちの何割は持ち越せるでもいいのかもしれないのですけれども、少し長期的な目標でポイントをためるということがあってもいいのかなという気持ちでお尋ねしました。

それから、40代から65歳までの方に対するインセンティブとして、ためていけると65歳になるときにちょっとしたボーナスがつくなんていうこともあるといいかなと思ったりしました。もちろん、これはどうしても原資のかかることですから、何ができる、何ができないという予算制約もあるので、単なるアイデアとして申し上げます。

それから、先ほどキャラクターが今日の道路はつるつるだよとか、頑張り過ぎていませ

んかとありましたけれども、うちの家内の行動を見ていると、毎朝、ゲッターズ飯田かなんかの占いの本を見て、6月13日、今日はあまり無理をすると体に来ると言いながら出かけていくので、自分の好きな占いサイトの一言が出るなんていう連動もありかなとちょっと思いました。

○梶井委員長 有効期限は重要かなと思います。行政は年度会計ですから、すぐそこにこだわるかもしれませんが、1年ごとというのはちょっときついかもかもしれませんので、そこも柔軟にお考えいただければと思います。

ほかに皆さん、何かお気づきのことはございませんか。

○大西委員 アプリの機能としてどこまでかというところはあるのですが、履歴を自分で遡って見ることができるかどうかはこの資料だけでは分からなかったのです。人とのつながりというポイントがどういうふうに獲得できていて、ここ半年は人とのつながりは全然取れていないなど、そういう振り返りのような機能はあるのでしょうか。

○事務局（横谷調整担当課長） 現時点では、一部の機能、実績について、カレンダー機能のような形でグラフにして振り返って示すというものがございます。歩数は、もちろんグラフでこのアプリを開始して以降のものが見られるようになっておりますし、また、体重や血圧につきましては、日々入力していただいたものをグラフにして可視化するところが非常に重要と思っており、履歴として遡って見られる機能を設けております。それから、ポイントの獲得履歴自体も、ポイントメニューの中のサブメニューで持っておりますので、そちらである程度遡って振り返ることができると思います。

ただ、全ての活動を一覧化してダッシュボードのように遡って見られるような機能までは現時点では実装には至っておりません。

○大西委員 振り返ってこうだったから、もう少しこうしようというところもあると思うのです。あまり長期間だとデータをどこまで持っておくか、難しいところもあると思うのですが、少し振り返りもできるとよいと思いました。

また、年度ごとにということであれば、例えば40歳から使っている方は、毎年度どれぐらい達成できてここまで来たのか、過去を遡って年間獲得ポイントのグラフが見られると、自分は結構頑張ったなと振り返ることができてよいのかなと思います。若い頃から長く使うのは、絶対どこかで飽きてしまうので、そういう工夫があるといいと思います。

あとは、年間で、いろいろなイベントのような形で、みんなだんだん飽きてきたかなというときにまた刺激を与えるという、働く世代にもポイント2倍キャンペーン中みたいな感じで、この2か月は歩いた分がポイント2倍になりますよという期間をぼんと途中に入れるとまたぐっと回復するということがあります。

結局、原資はどうするのだという話にはなってしまうので、何でもかんでもポイントをつけるというふうにはできないと思うのですが、例えば、冬は無理して出かけて転んで骨折して寝たきりということになると本末転倒ですから、もう少しハードルを下げて少ない歩数でも獲得できるようにするなど、冬期間、何月から何月までは2,000歩でも何

ポイントは獲得できますとちょっとプラスするとか、季節に沿って傾斜を変えるという配慮があってもいいかと思います。

運用する側でいろいろな条件を設定してとなると、何月でまた設定を変えてというのがすごく大変だと思うのですが、そういう工夫もありかなと思いました。

○梶井委員長 皆さん、専門的な知見がいっぱいなものですから、冬と夏を変えたらどうかなど、本当にいろいろなアイデアがたくさん出ています。何ととっても、山本委員が札幌をアプリ技術のメッカにするとおっしゃったように、札幌市はすごいと、データもこういうふうを活用しているとか、メッカになっていいと思うのです。ですから、そこを目指していただきたいのですが、一遍に何でもやろうと思われなくてもいいと思うのです。これからモニターも入るわけですから、その結果も見ながら少しずつイノベーションして、メッカになるというところをお願いしたいと考えております。

ほかにございませんか。

○高野委員 非常にシンプルな話ですが、ポイント交換の方針ですけれども、例えば、一応自分では頑張ったけれども、年間200ポイントしかたまらなかったという人が出てきたときに、200ポイントでも何かしら利用できるようにする、ということを考えてあげてもいいのかなと思います。そうすると、一応自分で頑張って、300ポイントしかないけれども、プレゼントで当たればこれが来るわと思うと、ゴミにはならない喜びになるのではないかという感じがします。

○梶井委員長 残り時間が少なくなってまいりましたけれども、ほかにございませんか。

○平本副委員長 ちょっとネガティブな話かもしれませんが、これは市民の方が利用することが当然前提になっていると思うのですが、住民票が札幌にある方がこのアプリに登録して利用している、それでポイントが交換できるというアイデンティティーはどうやって確認するのでしょうか。

○事務局（横谷調整担当課長） 当然ですが、このアプリは札幌市民を対象としたサービスになるのですが、それをどのように特定していくかということでございます。

65歳以上の方々につきましては、私ども札幌市から郵送で登録のための通知を送らせていただくのですが、その際に一人一人にユニークなQRコード、2次元コードを印刷したものをお配りいたします。インストールするとき、アプリの登録をするときには手入力なるべく少なくしようということで、その2次元コードを読み取っていただくと、こちらで割り当てているIDとパスワードがアプリに登録されるという仕組みを取っております。したがって、アプリ自体には個人情報を持たない、札幌市のシステムとして、私どもがサーバーでデータ管理しているIDによって、それがどなたのIDであるかが特定できる、このような形で、65歳以上の方については札幌市民と特定して運用してまいります。

40歳から64歳の方々にはそういった通知は送らないのですが、プレゼント抽選に当選したときに札幌市民であることを特定した上でプレゼントを差し上げるという形を取

ります。

○平本委員 例えば、途中で転出された場合も今のサーバー側の紐づけでちゃんと確認できるということですか。

○事務局（横谷調整担当課長） もちろん、転出して資格を喪失した、あるいは、亡くなったという情報は、ご本人に手続をしていただくことはなく、こちらで把握できます。

○梶井委員長 ほかにございませんか。

○山本委員 今、手続をお聞きしてはと思ったのですが、QRコードが送られますと、そのQRコードがうちのおじいちゃんにきました、90歳です、もう歩けませんと。孫を連れてきて、君、これをやりなさいといったときはどうなるのでしょうか。

○事務局（横谷調整担当課長） もちろん、ご本人が持っているアプリで登録していただくことが不可欠になりますので、間違えてしまった場合には一旦取り消していただいて、読み込み直していただくことが必要になります。

○山本委員 間違った場合はいいのです。現在、私は敬老パスホルダーなので、郵便局に行かないと入金できないというのは、IDとそれを登録する、チェックする場所があるから本人が同定できているのです。

僕が今、お聞きしたプロセスの中にはそれが入っていないのです。まず、送りました、家庭に届きますと、おじいちゃんは歩けないから私が代わりにやるよと言って、孫のスマホにIDが登録されて、サインインしましたというときにどうなりますかということです。

○事務局（横谷調整担当課長） こちらでは、システム的に、お孫さんのスマホであるということまでは把握ができないものですから、本人同定というところでは、今申し上げたプロセスだけでは限界があろうかとは思いますが。

○山本委員 試行の段階では良いのですが、本運用に向けては、敬老パスと同等のセキュリティ基準や個人認証が必要になるのではないかと思います。

○事務局（横谷調整担当課長） 他都市の状況も踏まえて、まずは個人情報をしっかりと守るところは必須だと思っております。個人情報の漏えいの少ない、心配のないシステムをしっかりとつくる、あとは、ユーザーの方々の登録の手続の際の負担をなるべく簡便にしていけることも大事だろうと思っております。

その上で、今、委員からご指摘いただいたセキュリティの部分は、例えば、敬老パスにつきましても、郵便局に行くときには本人確認ができたとしても、実際にそれを使うときにできているかということ、それは限界があります。どのようなシステムもある程度の限界点がございますけれども、今、私どもとして考え得る最大限セキュアなものをつくってまいりたいと考えております。

○梶井委員長 なかなか際どいところだと思いますけれども、ご努力いただければと思います。

ほかにございませんか。

○大西委員 今のことに少し関わるのですが、プレゼントの応募資格はないけれども、市外の人もダウンロードして使うことはできる、ポイントは一応たまっているように見えて、使いようはないけれども、使うことはできるということになるのでしょうか。

○事務局（横谷調整担当課長） アプリのストアが全世界に公開されておりますので、アプリ自体はどなたでもインストールできますが、札幌市のサービス、給付を受ける資格はしっかりと札幌市民に限定させていただくということでございます。

○大西委員 先ほどお話しした家族と接触してもポイントがという場合、例えば、市外に住んでいるお孫さんがアプリを入れていて、おじいちゃん、おばあちゃん、遊びに来たよというときに、そういう触れ合いでもアプリ同士でつながりポイントみたいなものが入るとすれば、お孫さん側には何も入らないことにはなりますが、市外の人も使うことで札幌市の人に何かいいことがあるというのもあるのかなと思って伺いました。

○梶井委員長 皆様からお気づきの点はありませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○梶井委員長 今日は、一昨年に引き続いての久しぶりの会議でしたけれども、様々な専門的なご意見をいただきまして、大変ありがとうございます。充実した時間になったと思います。

先ほど、スケジュールの説明がございましたけれども、この後、500人の方の市民モニターによる試行を経まして、また、その結果をまとめていただいて、それを踏まえての次回の委員会の開催になろうかと思います。また日程調整等させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、一旦、事務局にお返ししたいと思います。

6. 閉会

○事務局（足立高齢保健福祉部長） 長時間にわたりまして、貴重なご意見をありがとうございました。

今、委員長からもお話がありましたけれども、次回の会議につきましては、また委員長、委員の皆さんと調整させていただいてご案内させていただければと思います。

本日はありがとうございました。

○梶井委員長 どうもありがとうございました。

皆さん、お疲れ様でした。

以 上